

世界文学全集 9

プーシキン

スペードの女王他

ツルゲーネフ

獵人日記 けむり

河出書房

世界文学全集 9



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚 富雄
中島 健蔵

昭和37年7月25日 初版発行

昭和44年8月1日 18版発行

定価 430円

訳者	神池西清 田健太郎
発行者	中島隆之
印刷者	草刈龍平
装幀	原 弘
印刷	刷・中央精版印刷 株式会社
製本	本・中央精版印刷 株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

プーシキン

故イヴァン・ペトロヴィチ・

ベールキンの物語

その一発

吹 雪

葬儀屋

駅 長

質百姓娘

スペードの女王

ツルゲーネフ

セ

二

三

四

五

六

獵人日記

あいびき	二七
ベージンの草場	二七
生けるご遺骸	一四九
リゴーフ	一六五
チエルトプハーノフとネドピユースキン	一七七
チエルトプハーノフの最後	一九六
けむり	二三

年譜	(池田健太郎) 四一
解説	(池田健太郎) 四九

A^ア・P^ペによつて刊行されたる

故イヴァン・ペトローヴィチ・

ベールキンの物語

神ブ
西^シ
清^キ
訳^ン

プロスターコヴァ夫人

それならもう、あなた、この子は小さな時から
稗史わいしは大好きですの。

スコチーニン

ミトロファンは私わしに似ましてな。

——『未成年者みせうねんしや』

刊行者のことば

いま読者の高覧に供せられるI・P・ベールキンの物語集の刊行を企てるに当たって、私どもはたとえ簡単でもいいから故作者の伝記を添えて、祖国の文学を愛好せられる人士にしてみればさらさら無理からぬ好奇心を、満たす一助としたいと考えた。そのため私どもは、イヴァン・ペトロヴィチ・ベールキンの最も近い縁者でありかつ遺産相続人である、マリヤ・アレクセーヴナ・トラフィリーナに照会を發したのだが、遺憾ながら彼女は、彼に関する一片の消息をも私どもに伝えることができなかった。つまり彼女は、故人に一面識すらもなかったのである。その代わり彼女は、この件についてはイヴァン・ペトロヴィチ生前の親友であった、さる尊敬すべき紳士に依頼するがよからうと勧めてくれた。私どもはこの助言に従って同氏に照会狀を發したところ、次のようううってつけの返事を受けとったのである。それを

一字半句も改めず、また何らの注釈をも加えずに、ここにかかげることにする。——高風まさに欽慕すべきもの考え方、および感動すべき友情の貴い記念物として、同時にまた語り得て余蘊なき伝記的消息として。

***様尊下。

本月十五日付の御高書、同月二十三日までに拝受、^{うせい}迂生の莫逆の友たりかつ隣村の地主たりし故イヴァン・ペトロヴィチ・ベールキンの死生年月日、その軍隊勤務、家庭の状況、またその仕事および性格について委細御承知相成りたき趣、正に^{はしやう}拝誦^{きやうろく}仕り候。みぎの貴需に相添い候事は、^か迂生のまことに本懐とする所に有^あり、よって謹んで、故人の談話ならびに^か迂生自身の目に映じ申し候事どもを、記憶にのぼり候まま左に逐一申し進ぜ候。

イヴァン・ペトロヴィチ・ベールキンは、高潔にして由緒正しき父母の間に、一七九八年をもつてゴリューヒノ村に出生す。亡父陸軍二等少佐ビョートル・イヴァーノヴィチ・ベールキンは、トラフィリーン家の女ペラゲーヤ・ガヴリーロヴナを娶りしものに有^あ之候。亡父は格別富裕とはあらねど、まず中等の資産を有し、しかも経営にかけてはすこぶる腕利きに候いき。その一子は、村の役僧より初等教育を受け申し候。彼が読書およ

びロシヤ文学方面に興味を有せしは、思うにこの尊敬すべき役僧に負うもののごとくに存ぜられ候。一八一五年、故人は歩兵獵兵連隊（隊号は記憶せず）に入隊、一八二三年まで引続き同連隊に勤務いたし候。しかるに両親がほとんど時を同じゅうしてこの世を罷り候ため、退職を願ひ出、世襲領地たるゴリューヒノ村に帰郷致すの余儀なきに立ち至り候。

さて領地の支配を致す身となるや、イヴァン・ペトロヴィチはその無経験と温厚なる性情のため、ほどなく経営を等閑に付し、亡父の手によって布かれたる嚴格なる秩序を弛緩せしむるに至り候。実直にして敏腕なる名主は、百姓共の不滿を買いおりしが（これ彼らの習性に有之）、彼はこれを罷免し、村の管理をば女中頭の老婆の手に委ね申し候。そもそもこの老婆は、その物語り上手をもって主人の信用を博したる者にて、生来愚鈍、およそ二十五ルーブル紙幣と五十ルーブル紙幣の区別もかつてつきたることなき底の人物に有之候。百姓どもは、この老婆が彼らのごとくの名付親たりし關係上いささかの畏怖の念をも抱かず、また百姓が選挙せる新しき名主は、彼らに処することすこぶる寛大、馴合ひにて詐欺を働き、ついにはイヴァン・ペトロヴィチをして賦役を廢して、きわめて低額なる人頭税を定むるの余儀なき

に立ち至らせ申し候。しかのみならず百姓どもは、主人の弱氣につけ入り、一年目には莫大の免租を強請いたし、その後は年々人頭税の三分の二以上を、胡桃、越橘の類をもつて支払い、それすらもなお未納のもの有之候いき。

迂生はイヴァン・ペトロヴィチの亡父と交友關係にありし者なれば、その一子にも忠言を呈するの義務ありと愚考し、彼が等閑に付したる先代の秩序を再興いたすよう直言致したることも一再にとどまらず。ある時のごときは、この目的をもつて彼を訪問、帳簿の提示方を要求すると共に、かの騙児名主を呼び出し、イヴァン・ペトロヴィチの面前にて、右帳簿の検査にとりかかり申し候。弱年の主人は、最初がほどは能うかぎりの注意と精勵とをもつて、迂生のなすところに追隨しておりしが、勘定の結果、最近二か年間に百姓の員数は増したるに反し、家畜家畜の数は著減せることが判明いたすや、イヴァン・ペトロヴィチは最早この最初の情報をもつて満足いたし、そのうえ迂生の言に耳を傾けんともせず、やがて迂生がおのれの穿鑿ときびしき糾明とをもつて、かの騙児名主をば困惑の極に陥れ、ついに一言をも發し得ざるの窮境に立ち至らせ申し候おりには、ああそも何たる無念ぞや、イヴァン・ペトロヴィチがその椅子の上にて、すでに鼾声雷のごとくなるを耳にいたし候。こ

の時以来、迂生は彼の家政管理に容喙いたすことを断念、彼の事業をもまた彼自身をも、なべて天意のままに相任することといひし候。

とは申せこのため、迂生らの友情がそこなわれたる次第には決して無之候。いかんとなれば迂生は、わが国の若き貴族の多分にもれざる彼が弱氣と、破滅の因なる懈怠とをあわれみて、心底よりイヴァン・ペトロヴィチを愛したるがゆえに有之候。まことにかくも温順にして高潔なる青年は、愛せざらんと欲するもなお愛せざるを得ず。一方またイヴァン・ペトロヴィチも、迂生を年長者として敬いくれ、心より迂生に信服いたし居り候いき。じつのところ習慣においても、ものの考え方においても、また性格においても、迂生らはほとんど互いに一致するところ無かりしにもかかわらず、彼は迂生が談論の率直なるを喜び、その最期の際まで迂生と相見ざる日はほとんど一日もなかりし次第に有之候。

イヴァン・ペトロヴィチはきわめて控え目なる暮らしぶりにて、いやくも放肆にわたることはいっさいこれを避け申し候。彼が酩酊いたしおるを見かけしことは、迂生ただの一度も無之（これじつに当地方にあっては空前の奇跡とも申すべし）、また女性にかけてはなかなかの好き者にて候いしも、その内気さに至ってはじつ

に処女のごときもの有之候いき*。

御高書中に御名指しの物語数種の他に、イヴァン・ペトロヴィチは数多の草稿を遺し候いしが、その一部は迂生の手許に存し、また一部は例の女中頭によって、家庭の雑用にあてられ申し候。現に昨冬のごとき、彼女の住する離れの窓はことごとく、故人が完成するに至らざりし長編小説の第一編を以て貼り塞がれし次第に御座候。御申越しの物語数種は、故人の試みし最初の述作かと存ぜられ候。イヴァン・ペトロヴィチの申しおり候ところによれば、その大部分は実話にて、故人がさまざまの人物より聞きおよびたるものの由に有之候**。

さりながら、編中にあらわるる人名はほとんど全部故人自身の創案にかかり、地名村名に至ってはこの界限より借りたるものにして、したがって迂生の持村の名もいづこやらに見ゆる次第に御座候。もつともこれは悪意より出でたることには無之、ただただ想像力の不足によるものに有之候。

イヴァン・ペトロヴィチは一八二八年の秋、感冒熱の侵すところとなり、ついで熱病に變じ、当郡の医師のたゆまざる努力もその甲斐なく逝去いたし候。ちなみにこの医師は、特に疥癩などのごとき慢性諸病の治療にかけてはすこぶる名医に有之候。イヴァン・ペトロヴィチ

チは数え年三十にして迂生の腕の中にて息を引きとり、
ゴリューヒノ村の教会なる亡父母の身近に埋葬せられ申
し候。

【*原注】ここに一つの逸話が續いているが、余計の
ものと思われるのでここにかかげない。とはいえそ
の逸話には、イヴァン・ペトロヴィチ・ペールキ
ンの思い出を傷つけるようなものはいっさい含まれ
ていないことを読者に断言するをばからない。

【*原注】 實際ペールキン氏の原稿には、各編のはじ
めに著者の手跡をもって、何某（官等または職業、
名および姓の頭文字）より聞く、というふう頭に頭記
せられている。物好きな穿鑿家のためにここに書き
抜いてみると、『駅長』は九等官A・G・Nが物語
ったところであり、『その一発』は陸軍中佐I・P・
Lが、『葬儀屋』は手代B・Vが、『吹雪』および『贗
百姓娘』は少女K・I・Tがそれぞれ物語ったところ
である。

イヴァン・ペトロヴィチは中背にて、目は灰色、髪
は亜麻色、鼻筋とおり、顔色白く、細おもてに有之候い
き。

さて迂生が今は亡き隣人また友人の、暮らしぶり、仕
事、性格、および、風貌ふうぼうに関して思い出で候ことは、右
に相済み申し候。ただし万一本状のうちになんらかの御
役に相立ち申し候こと有之候とも、迂生の名を御掲出の
ことは平に御容赦賜りたく願上候。けだし迂生は、作者
なるものを敬愛することにおいては敢えて人後に落ち申
さずとはいえ、その職業に入るは無用のこととも、また
年甲斐もなき業わざとも存ぜらるるがゆえに有之候。終わりに
衷心より敬意を表し、併せて云々。

一八三〇年十一月十六日

ネナラードヴ・村にて

故作者の尊敬すべき親友の意志を重んずることを義務
と考え、私どもはここに、同氏が私どもに提供せられた
報道に対して深甚の謝意を表し、あわせてまた読者が以
上の報道の誠実と懇切とに敬意を払われんことを期待す
るものである。

A^r・P^e

その一 発

われら互に射ちあいぬ。

——パラトインスキー^(三)

余は決闘の認むる当然の権利によって彼を射ち殺さんと心に誓った(余の彼に対する一発はまだ残されていたのである)。

——『露営の宵』

—

わたしたちは***という小さな町に駐屯^{ちゆうとん}していた。地方師団の将校生活といえは、せんごくご承知のとおりである。午前は教練と馬術、昼食は連隊長の官舎か、でなければユダヤ人の小料理屋でやる、さて晩になればボンスとカルタだ。***には舞踏会を催してくれるような家庭は一つもなかったし、年ごろの娘なんぞはひとりもいなかった。わたしたちはお互いの宿に集まるのだったが、そこには軍服姿のほかは何一つ見られなかった。

ただひとり、軍人でなしにわたしたちの仲間に加わっている男があった。年は三十五ほど、そのためわたしたちは彼を老人あつかいにしていた。世間を見てきただけに、わたしたちにくらべればいろいろな点でたちまちさっていたし、かつその平生の沈鬱^{しんうつ}さ、激しい気性、また毒舌癖^{どくせふ}などが、若いわたしたちをひどく敬服させたものである。何かしら一種の神秘が彼の運命を包んでいた。どうもロシア人らしいのに、名前は外国ふうである。かつては驃騎兵連隊^{ひょうきへんれんたい}に勤めて、相当の昇進をしたというが、それがなぜ職を退いて、こんな寂れた田舎町にひっこみ、貧乏くさい一方には金づかいの荒い生活をするようになったのか、その動機を知るものはひとりもなかった。古びた黒フロックを一着におよび、外出にも乗り物を使ったことのないくせに、連隊の士官にはだれかれの差別なくごちそうしてくれるのだった。もつともごちそうといっても、退役兵士のこしらえた二品か三品に過ぎなかったが、その代わりシャンパンは大河を決するがごとくに出た。彼の資産や収入のことを知るものはひとりもなく、また無遠慮にそれを彼にたずねるものもなかった。なかなかの蔵書家だったが、その多くは兵書と、それに小説類だった。彼は喜んで貸してくれるが、返却を求めたことはけっしてない代わりには、自分の借りた本

も持ち主に返したためしかなかった。彼のおもな日課はピストルの練習で、部屋の壁は一面の弾痕にむしばまれて、まるで蜂の巣のように穴だらけだった。ピストルの豊富なコレクション(蒐集)は、彼の住むすばらしい小屋に見られる唯一の贅沢品であった。その腕前と来たらとても人間業とは思えないほどで、彼がおまえの軍帽にのせた梨を射落としてやろうかと言ひ出せば、頭をさし出すことをためらう者は連隊じゅうにひとりもなかった。わたしたちの間にはよく決闘の話が出たが、シルヴィオ(と彼を呼ぶことにしよう)はその話になるとけつして口を出さなかった。決闘したことがあるかという問いには、そっけなく「ある」と答えるだけでくわしい話はせず、そうした質問を不愉快に思うらしかった。どうやらその良心には、何者か彼の戦慄すべき臍前の不幸な犠牲者が横たわっているらしい——そんなふうになつたところは推量していた。とはいえ、彼に何か臆病に類したところがあるなどとは、わたしたちは疑つてみたこともなかった。その風貌だけで、そうした疑念を一掃する人間がいるものである。と、思いがけぬできごとが、わたしたち一同をおどろかすことになつた。

ある日のこと、わたしたち将校が十人ほどで、シルヴィオの家で屋食をよばれた。いつもの調子で飲んだ——

というのはつまり大いに痛飲したのである。食事がすむとわたしたちは、ひとつカルタの親になつてくれと主人にねだりはじめた。彼はめつたに賭遊びはしない男だから、なかなか承知しなかったが、とうとうカルタ札を持つて来させ、テーブルに金貨を五十枚ほどぶちまけて、札をくばりにかかった。わたしたちは彼を取り巻いてすわり、勝負が始まつた。シルヴィオは勝負のあいだはまったく黙りこくつて、けつして口争いや弁解じみたことをやらない男だった。賭け手がどうかした拍子に勘定違いをすると、彼は即座に不足額を支払うか、または自分の額を書き留めるのだった。わたしたちは先刻それを承知だったから、彼が自己流に切り盛りするにまかせておいた。ところがここにひとり、近ごろわたしたちの隊へ転任して来た士官がまじつてゐた。彼も勝負に加わつてゐたが、ついうっかりして札の角を余計に折つてしまつた。シルヴィオは白墨を手にとつて、例のとおり算盤を合わせておいた。士官はそれをシルヴィオのまちがいだと思つて、くどくど弁じ立てだした。シルヴィオは黙つて札をくばりつづけた。士官はがまんがなくなつて、ブラシを手にとると、余計だと思ふ書き込みを消してしまつた。シルヴィオは白墨をとつて再び書き込んだ。酒と勝負と同僚の笑い声にのぼせあがつた士官は、非常な

侮辱を受けた気になって、かっとして卓上の銅燭台をつかむと、シルヴィオめがけて投げつけた。こちらはわずかに体をかわした。わたしたちは狼狽した。シルヴィオは起ちあがると、憎悪に色あおざめて、両眼をぎらつかせながら言った。「きみ、どうぞお引き取りを願います。そしてこれがわたしの家で起こったことを、せめてありがたいと思ひなさるがいい」

その先がどうなるかはわたしたちには明らかだった。わたしたちはこの新しい同僚を、もはや殺されたも同然と思ったのである。その士官は、どうなりと「親」のお気に召すしかたでこの侮辱のお礼をしようと言いつて、さっさと出て行った。勝負はまだしばらく続いたが、主人にとってはもうカルタどころの騒ぎでないのを感じると、ひとり抜けふたり抜けして、「まもなく欠員ができるな」などと語り合いながら、それぞれの宿に散って行った。

あくる日、馬場へ出たわたしたちが、あのかわいそうな中尉はまだ生きているかしらと口々に尋ねあつてゐるところへ、ひょっくりその当人が姿を現わした。わたしたちは同じ質問を彼に浴びせた。その返事によると、シルヴィオからはまだ何の音沙汰もないとのことだった。わたしたちは事の意外におどろいてしまった。そこでシ

ルヴィオのところへ行ってみると、彼は庭へ出て、門に貼りつけた一点札に一発また一発と弾丸を射ち込んでいた。彼はふだんにかわらぬ態度でわたしたちを迎えて、昨日のことは一言もいひ出さなかった。三日たったが、中尉はまだ生きていた。わたしたちは案外に思つて、いったいシルヴィオは決闘しない気かな？ と尋ねあうのだった。シルヴィオは決闘しなかった。彼はほんのちょっとした釈明で満足して、仲直りをしてしまった。

このため彼は、青年将校のあいだでひどく人気を落とすことになった。常々勇氣というものを人間最高の美德と見、それさえあればあらゆる悪徳もゆるされると考へてゐる青年たちの目には、煮えきらない態度はもつともゆるすべからざるものだったのである。とはいへしだいにいっさいは忘れられて、シルヴィオはふたたびもとの声望をとりもどした。

ただわたしだけは、もはや彼に近づく気になれなかった。生まれつき小説めいた空想の持ち主だったわたしは、謎のような生活をして、まるで何か神秘的な物語の主人公のようなこの男に、この事件の起こるまでは仲間じゅうでもいちばん強くひきつけられていたのである。彼のほうでもわたしが好きだった。少なくともわたしに対するときだけは例の辛辣きわまる舌鋒をおさめて、気軽

な、平生とはうって変わった愉快そうな様子で、よもやまの話をしたものである。しかしあの不幸な晩のことがあってからは、もう彼の名誉は汚されてしまった、しかも彼自身の意志によって汚点はぬぐわれずに残っているのだという想念が、どうしてもわたしの脳裡を離れず、これまでどおりの態度で彼に接することをさまたげるのだ。わたしは彼の顔を見るのも気がとがめた。もとよりシルヴィオは世故にたけた聡明な男だったから、すぐさまわたしの態度を気づいて、その裏を見抜いてしまった。彼にはそれがつらいしなかった。少なくとも彼は二度ばかり、わたしに何か打ち明けたそうなるふりを見せたことがあった。ところが、わたしのほうでそうした機会を避けているので、シルヴィオのほうでもわたしのことはあきらめてしまった。それ以来、ふたりは同僚のいる席で顔を合わせるばかりで、もとのように心おきなく語りあうことはなくなった。

村里や田舎町に住む人々にとってはじつに親しみの深い印象でも、とりとめのない日々を送っている都会人には察しのつかないことが多い。たとえば郵便の着く日等待つ気持ちがそれである。火曜日と金曜日には、連隊の庶務室は士官でいっぱいになり、ある者は為替を、ある者は手紙を、ある者は新聞を待っている。封書はたい

いその場で開封され、ニュースは口から口へと伝えられて、庶務室は活気に満ちた光景を呈するのである。シルヴィオは郵便物を連隊気付にしまらっていたので、その場に居合わせるのが常だった。ある日のこと彼は一通の封書を渡されると、ひどくもどかしい様子で封を切った。文面に走らせる彼の目は、異様に輝いていた。士官たちはてんでの手紙に夢中だったので、何ひとつ気がつかなかった。

「みなさん」とシルヴィオは彼らに言った、「ぼくはつごうによって即刻この町を去らなければならなくなりました。今夜すぐ出発します。どうぞぼくのところへお別れの食事に来ていただきたいと思います。それからきみのおいでも待っていますよ」と彼はわたしに向かって言葉を継いだ、「きつと来てくださいね」

そう言うとき、彼はあわただしく出て行った。わたしたちはシルヴィオのところまで落ち合うことにきめて、思いの方角に散った。

約束の時間にわたしがシルヴィオの家へ行ってみると、連隊じゅうの将校がほとんどひとり残らず集まっていた。すっかり荷作りがすんでいて、弾痕だらけの裸壁が残っているだけだった。わたしたちは食卓についた。主人がひどく上きげんなので、その陽気さはまもなく一

同に感染した。栓のはねとぶ音がのべつに響き、杯が絶えず泡だちしゅっしゅつと鳴るあいだに、わたしたちはあらんかぎりの熱誠をこめて、旅だつ人の道中の無事と多幸とを祈るのだった。食卓をはなれたときはもう夜がふけていた。玄関へ出て、てんでに軍帽を手にする一同に別れを告げていたシルヴィオは、わたしにまさになにに去ろうとする瞬間に、手をとって引きとめた。「きみにはちょっと話があるんです」と彼は小声で言った。わたしはあとに残った。

客は散ってしまった。わたしたちはふたりきりになると、向かい合わせに腰をおろして、無言のままパイプをくゆらしはじめた。シルヴィオは心配ごとがあるらしく、先刻のひきつったような陽気さはもう跡形もなかった。陰鬱な顔の蒼白さ、異様に光る両眼、口から吐きだす濃い煙——これらのため、彼はまぎれもない悪魔の形相を帯びていた。数分ののち、シルヴィオは沈黙を破った。「おそろくもう二度とふたたびお目にかかるおりはありますまい」と彼は言った、「お別れする前に、ぼくはきみに本心を聞いてもらいたかったのです。きみもお気づきだと思うが、ぼくはあまり他人の迷惑は気にしないほうです。だがぼくはきみが好きだから、きみの頭にまちがった印象を残して行くのでは、いかにもつらい気がするんです」

るんです」

彼は言葉を切って、燃えつきたパイプにタバコを詰めはじめた。わたしは目を伏せて無言だった。

「きみはさぞ奇怪に思われたことでしょう」と彼はつづけた、「ぼくがあの酔狂なR***に、当然の要求を持ち出さなかったのをね。なにしろ武器を選ぶ権利はこっちにあったのだから、あの男の生命がぼくの手中にあり、こっちの生命はまず安全だったことは、きみもご異存はありませんまい。したがってぼくは、事を荒立てずにすましたのはひとえに自分の寛大によるものと、そう言ってもいい立場にあるんです。だがぼくは嘘はつきたくない。もし自分の生命をまったく危険にさらさずに、あのR***を懲らすことができるのだったら、ぼくはだんじてあの男をゆるしはしなかったはずですよ」

わたしは愕然としてシルヴィオを見まもった。まさかこうした告白を聞こうとは思いがけなかったもので、わたしはすっかり狼狽してしまった。シルヴィオは言葉をつづけた。

「そうですとも。まったくぼくは、自分の生命を危険にさらす権利がないのです。六年前のことですが、ぼくはさる男から平手打ちを受けたのです。しかもその敵はまだ生きてるんです」

わたしは激しく好奇心をそそられた。

「きみはその男と決闘しなかったのですか？」とわたしはきいた、「じゃあきつと、何かの事情で物別れになったんですね？」

「われわれは決闘しました」とシルヴィオは答えた、「これがそのときの記念です」

シルヴィオは座を起つと、ボール箱から金モールの総のついた紅い帽子（フランス人がボンネ・ド・ポリース（軍隊略帽）というあれである）を取り出して、頭にかぶって見せた。帽子は額ぎわから一寸あまりの所を射抜かれていた。

「ご承知のとおり」とシルヴィオはつづけた、「ぼくは**驃騎兵連隊に勤めていました。ぼくの気性はきみも知つてのとおりで、人の上へ上へと出たがる癖がありますが、これは若いころからのぼくの情熱だったしだと思います。われわれの時代には乱暴がはやったもので、なかでもぼくは連隊きつての暴れ者でした。みんなで酒量を自慢しあったのですが、ぼくはあのデニス・ダヴィドフから賛歌をささげられた快男児ブルツォフを、飲み負かしたこともあります。決闘沙汰は連隊内に絶えたことがないし、ぼくは決闘があるたびに、立会人でなければ主役を勤めたものです。同僚からは崇拜されましたが、し

よっちゅう更迭している連隊長たちは、困ったやつだがどうにもならんといった目で、ぼくを見ていましたっけ。「ぼくが泰然として（それとも驕然としてだったかな）、わが世の春を楽しんでいたところへ、金があつて家柄のいいひとりの青年がわれわれの隊付きになって来ました（名前はまあお預かりしておきましょう）。ぼくは生まれ落ちてこのかた、あんなすばらしい果報者に出あったことはありません。まあ考えてもごらんなさい。若くつて、才子で、好男子で、ばかばかしいほど陽気な気性で、命しらずの勇氣があつて、家名と来たら天下にとどろいているし、小遣錢と来たらいったいいくらあるのやら自分でも見当がつかず、手もとに切れたためしがないという男です。この男がわれわれ仲間どんな作用をおよぼしたかも、ついでに想像していただきましょう。ぼくの王座に揺るぎが来たのです。やつはぼくの名声にひかされて、向こうから友誼を求めて来ましたが、ぼくが素っ気なくあしらつてやると、なんの末練もなくすいと離れて行つてしまいました。ぼくはやつが憎くなってききました。やつが連隊内や婦人仲間で人気を博して行くのを見ると、ぼくは絶望のどん底へつき落とされるのでした。そこで、喧嘩を吹っかけたが、こっちがエピソード（警句詩）をたたきつけてやると、向こうもエピソード